

家族がバラバラに なった戦争

西村 恭子 (82歳)

昭和20年3月まで、京都府庁前に両親、兄3人、姉、私、妹2人の9人で住んでいました。私は当時、小学3年生でした。

長兄は15歳で徴兵され、舞鶴港で乗っていた軍艦が爆撃に遭い沈没。その時、兄は地下で食事係をしていて助かりました。甲板には死体がゴロゴロあったと聞いています。

次兄は徴兵で特攻隊へ。天皇陛下のお盃をいただき、明日は出撃のところ終戦となり命は助かりました。兄2人が出兵の時は万歳三唱で送り出しましたが、その夜、父も母もずっと泣いていました。

戦争は激しくなり、市役所前、府庁前は類焼を避けるため強制疎開を余儀なくされ、残された家族7人は母方の叔父のツテで、島根県浜田市周布へ疎開しました。汽車に15時間ゆられて着いた

先は、山、川、海が近く、自然に恵まれていました。京都では配給の雑炊でひもじい思いをしていましたが、母が着物、帯、掛け軸などを、お米、実、野菜と交換してくれました。

昭和20年8月6日、広島に原爆投下。その時、私たちが周布川の堤防から見た空は真っ黒でした。そして敗戦、ラジオの玉音放送を聞いた三兄は泣いて裏山へ走りしました。

夏も終わる頃、長兄と次兄は大きなリュックを肩に帰ってきました。母はずっとずっと泣いていました。母は後に「京都へ帰りたい。でも京都には家もなく、帰る汽車賃さえもなく、途方に暮れていた」と言っていました。

父と長兄、次兄はやっと見つかった漆掻きの仕事のため、終戦から3年余りを経て京都へ。私は小学6年生の卒業式を終えて京都へ戻りました。

恐ろしい、悲しい戦争。絶対にしてはいけません。

に逃げ込んで一晩を明かし、翌日はさらに遠くの森へ避難して、また一夜を明かした。だが、なぜか父だけは玄関先に立ち尽くし、敵機を睨みつけて避難しようとはしなかった。

幸いにも死傷者は出ず、村民全員無事であったが、頭上に降りかかるバリバリというものすごい爆撃音は、今に至るまで耳の底に残っている。2、3歳の子の火が付いたように泣き叫んでいたその声とともに…。

家々の白壁は、すべて黒く塗り潰された。

小さな漁村に過ぎない伊根村がなぜ攻撃に晒されたのか？ その当時、伊根湾には全長125mの潜水母艦「長鯨」が避難入港しており、それを探

索して宮津方面より米軍のグラマン機が来襲したのであろう。村人たちも必死でその巨体を隠すべく、青島に生い茂る、切ってはならない御神木までも切り倒してその姿を覆ったが、キリモミ状態で攻撃してくるグラマン機に爆撃された。乗員105人は艦上で、あるいは爆風で海に吹き飛ばされて戦死した。その亡骸は青島を近くに望む小高い山の中腹に建つ慈眼寺に葬られ、後に慰霊碑が建立された。

中央部、司令塔あたりを爆撃された「長鯨」はその後、軍港である舞鶴港へ曳航され、戦後は復員

兵の輸送の任務を果たしていたとのことである。

伊根湾における空襲は、昭和20年8月15日の終戦日まで、わずか15、6日前のことである。実に無惨な戦争であった。二度と繰り返してはならないと切に思う。



京都生協は、戦争も核兵器もない平和な社会を望みます

2019ピースパレードを行いました

6月21日(金)、円山公園ラジオ塔から八坂神社、四条通を通って市役所前まで歩きました。

当日はよく晴れた天気の中、平和を訴えながらのにぎやかなパレードとなりました。



ヒバクシャ国際署名 10万筆の目標に 向您ご協力ください



ヒバクシャ国際署名は、誰もがすぐにできる世界平和の活動です。京都生協は2020年度までに10万筆をめざして取り組んでいます。誰もが安心して毎日をくらするために、皆さまのご協力をお願いします。

署名用紙は8月12日(月)から、宅配カタログに同封します。また、コープのお店でも同日より、サービスカウンターやレジで配布します。

<インターネット署名>

こちらから署名できます。▶
原則ひとり1回となります。

